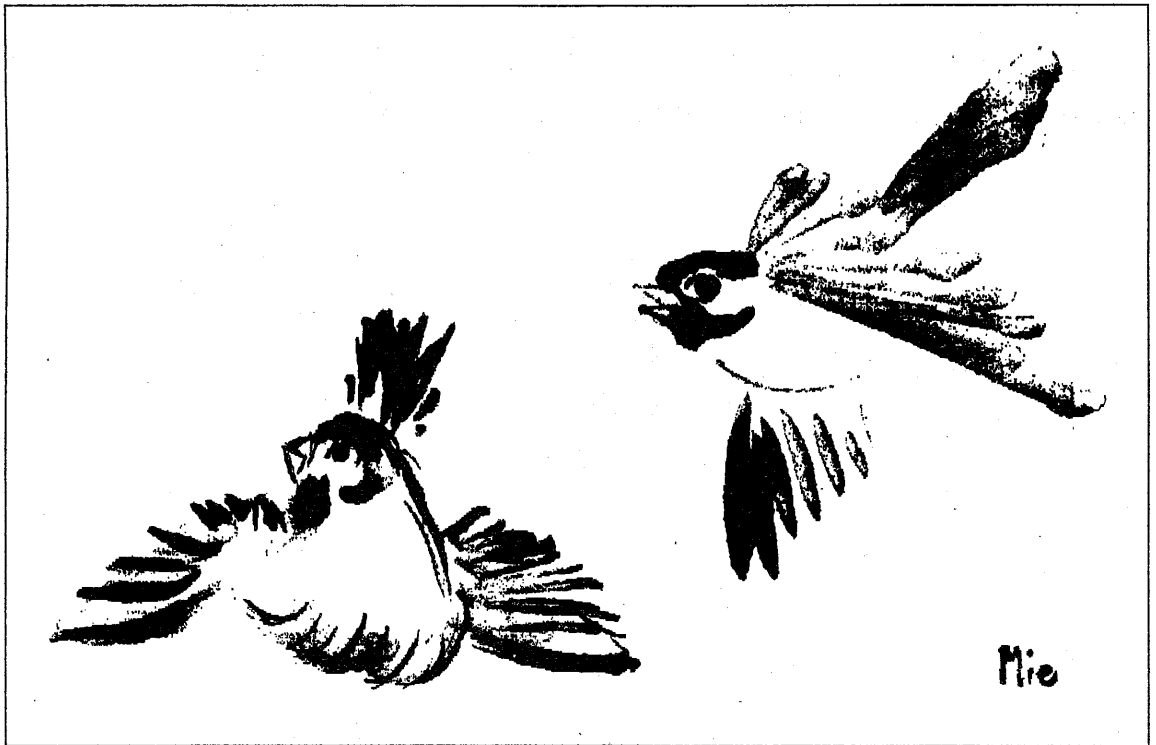


オリーブの樹

第11号

2002年4月26日 شجرة الزيتون

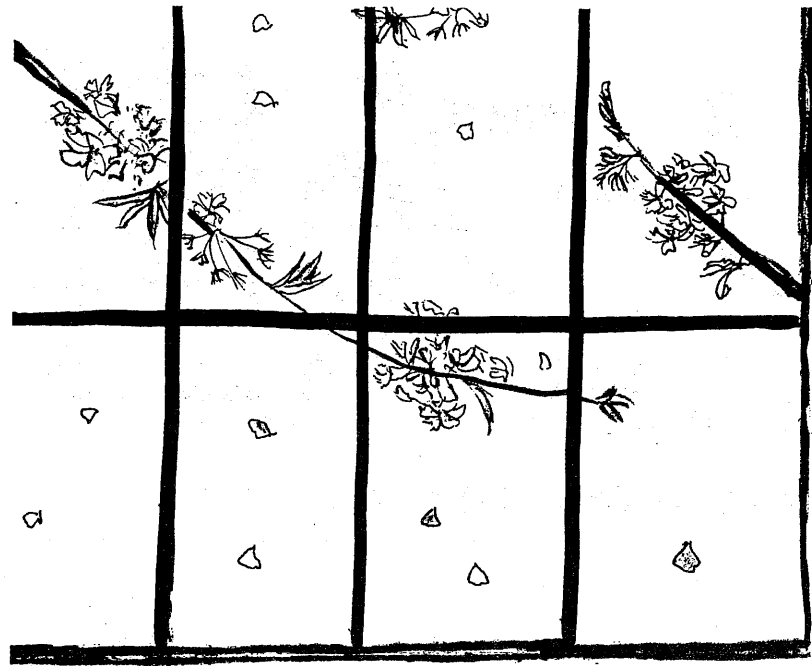
早期釈放！重刑策動をはね返し、重信さんを支えていこう！



目次

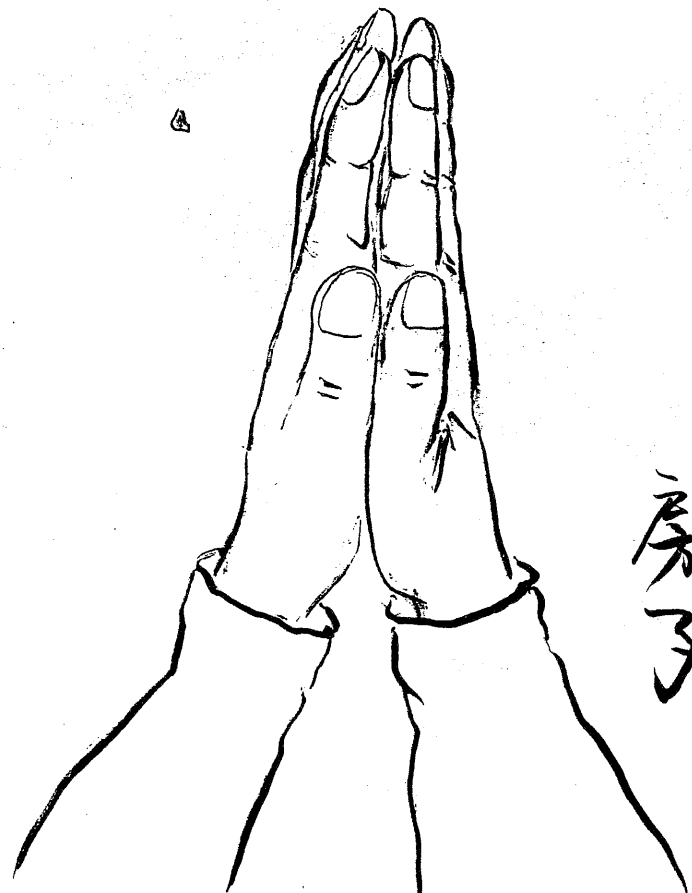
- P 3 独居より 重信房子
- P 9 プリズナージャーナル⑩ 重信房子
- P17 読者からの声
- P21 桜日誌 重信房子
- P23 シゲに捧げる「私小説」その9 山田美枝子

重信房子さんを支える会



桜花来よと獄窓開け放ち
風の舞見つ君を串う

房子



2002.4.2

《独居より》②

重信房子

「オリーブの樹」9号に答えて 3月17日

東京の桜開花宣言の3月16日、同じように、独居の庭先の老木の桜も花をつけました。3月15日、朝方の雨の後、萌黄色に紅が増え、陽だまりの中にそっと押したら、芽、蕾が音を立てて割れこぼれそうな気配でした。萌黄色の不思議を味わいました。そして、これから日々、咲き誇る桜に胸躍らせそうです。

世田谷で生まれ育った私は、春は菜の花畑と桜吹雪が思い出の中にいつもあります。丁度顔をなでる菜の花の花粉にまみれて畑で遊んだこと、その匂いの濃さに差し入れられた菜の花の匂いから、鮮やかにあの小さかった時を思い出しました。

もうひとつは桜です。「桜小学校」、「桜木中学校」と桜の吹雪の中に入学し、桜の花びらに糸を通して首飾りを作ったり、飽きることなく桜の花を写生したこと、自分の故郷の情景となっています。だから、いつも咲き、いつも散る大量の桜の群像が記憶に宿っていて、独居の窓際から10メートル位の距離にある桜の老木は、懐かしい思いを掻き立ててくれるのです。

桜がかって戦時、国にとってどういう象徴だったかはありますが、やはり自分の歴史に連なるリアリティの中で、美しいものは、それを肯定し続けることによって、私たちに於ける桜の美しさを増し続けるでしょう。

3月15日、「オリーブの樹」第9号を受け取りました。支える会の皆さんの努力に感謝します。表紙を描いてくれ、いつも小説で参加してくれている山田さん、ありがとう。カラス天狗さんの庶民の側の分析、なかなか話し面白く読みました。獄中では、新聞以外の情報が入りにくいので、興味深く読みました。そして、わたんの投稿とそのプロ並みのマンガの絵、感動！支える会や友人たちは、皆能力実力派？その割に、ホームレスすれすれの人も居るとかで、心配です。

9号に「交流コーナーに答えていない」と、清算書みたいな質問一覧が載っていました。読み手の側に身を置いて楽しく読み、交流の為に書くべきことと思っていなかったのが本音です。むしろ皆で、様々

な意見が交流されていくのを喜んでいます。

質問の幾つかは、あちこちで、かつて述べていたり、書かれていたりするものですが、気ままに幾つか今回書いて送ります。

質問に、「どうしてパレスチナを選んだのか？」という点と、「テロリストと見られていますが、どう思いますか？」と聞かれている点について、今回書いてみたいと思います。

「オリーブの樹」に連載中の山田さんの小説のタイトルは、「女は皆テロリスト」というタイトルだそうです。「テロリスト」を、女は止むに止まれず他者を生かす為に生きることによって、そういう指弾を受けるという意図を込めて、書かれているのかもしれませんが、でも、人間らしさを「テロリスト」と呼ぶ比喩としての「テロリスト」ではなく、人間性を喪失した人殺し集団としての「テロリスト」として、宣伝され続けてきたことに、怒りと共に困ったものだのため息をついています。

私の娘も「テロリスト」の娘であるが故に、ただかパレスチナ料理教室での文化交流が、イスラエル大使館の抗議などというとんでもない内政干渉、人権侵害に至り、「テロリスト」の娘である為に、この日本に来て初めて不都合な差別を幾つも受けています。

「テロリスト？」いつから、こんな風に呼ばれてきたのだろう？「テロリスト。勝たない革命家は、皆そう呼ばれてきたのよ」などと、昔なら平然としていたかもしれません。そう呼ばれてきた人々を受け入れ尊敬する人々が居、自分たちの正義性の価値を共にする社会があり、その中に生活し、漬かっていましたから。

しかし、「敵の一方向的宣伝」のみならず、私たちの闘い方自身の非が、「赤軍」と聞いただけで、連合赤軍も、よど号も、ひっくるめて「テロリスト」として、私に向けられているのだと、日本に潜在する頃から実感したものでした。日本の人々にとって、遠く悪のイメージに化石化されていたことすら、深刻に自覚していませんでしたから。

70年代、CIAが今ほど“好意的”にパレスチ

ナに迎えられていず(かつてCIAと判れば、生きて帰れなかったアラブで、今や、「テネットCIA長官の仲介による停戦案」などと、表舞台にCIAが登場する時代です)、ソ連のKGBとか、地下攻防も激烈な時代に、パレスチナ解放勢力と共に、国際遊撃戦を闘いました。

私たちが「どうしてパレスチナを選んだのか?」と問われていますが、丁度時代の出会いだったと言えるでしょう。

私たちが、パレスチナに行った事情は、国際的な革命を目指すということと同時に、日本の闘いはこのままではだめになるので、外国で闘っている人々がどんな風に闘っているか学びつつ、日本の革命を考え直したいというのが第1でした。そして、第2には、国家でない解放運動のフィールドに向かうことを考えていました。

当時、1年前によど号でハイジャックして社会主義国に行ったまま何の力にもならなかったので、三ブロック(帝国主義本国、社会主義諸国、第三世界諸国の三つのブロック)の闘いを統一するなど、大言壮語の夢のロマンに燃えていた人々は、国家でない解放運動を目指しました。

丁度、70年秋、パレスチナ革命飛行場ニュース(ヨルダンの砂漠に西欧の飛行機をハイジャックし、機体を爆破して、パレスチナ解放運動を世界に訴えた事件)が、世界に大きく報道されることによって、パレスチナ解放運動の置かれている特殊な位置を知りました。侵略者を自分の領土から追放する解放運動というだけでは、問題が解決されないのがパレスチナということです。世界の資本主義の中核をなす



ユダヤ資本に支えられた、シオニズムという国際的な運動と対決せずに、解放がなし得ない存在として、パレスチナがあったことです。

そこには、第三世界の矛盾と帝国主義国の矛盾をも解決し得る何かがあるのではないかと? 当時は、国内の武装闘争(今から考えれば、とても武装闘争と言えるものではなく、大菩薩峠とか、逮捕されて当然のようなあり方でした)の行き詰まりから、やはり、武装闘争を国際的に闘っているパレスチナの闘いに幻想を持っていました。そうした「青い鳥」を探すような主体状況で、パレスチナ解放運動の生死を日々問われる、戦争の中に参加しました。

時代の勢いもあり、私が渡った当時は、日本も連合赤軍事件の前で、まだ左翼運動も負けつつも闘い続けていました。ベトナム解放の闘いも勝利的に前進していました。そうした中で、パレスチナの闘いに貢献出来ることは何でもしようという思いからスタートしました。

その中に、政治も軍事もありました。パレスチナ解放の闘いを共にし、かつ、パレスチナで受け入れられた力をばねに、日本の変革にも関わっているつもりで、「後先を考えずに」闘ったと言えます。

その結果として、「テロリスト」と言われています。当時、70年代は、日本政府が私たちを「国際手配してくれ」とインターポールに頼んでも、インターポールは、各国の革命勢力、反体制運動、解放運動主体には、「OK!」と手配する風潮はありませんでした。そういう処に、今では考えられない時代の反転する前の姿があります。日本政府の要請に対し、「青色手配」としてやっと合意されました。「青色手配」とは、どこにいるか探し、情報が入ったら知らせるが、逮捕はしないという扱いでした。(それに対して、「赤色手配」というのは、クリミナル、犯罪者と認めて国際手配するもので、80年代後半だったと思いますが、「赤色手配」となっています。)

つまり、70年代は、闘いの正義性は、反体制、解放勢力が圧倒的に握っていました。そういう中に居た私たちは、国内の連合赤軍に悲しみ怒りつつ、鉛のような敗北感の社会に居たのではなく、闘いの中で解放される世界に居ました。その分、PFLPやパレスチナ革命の正義性に身を寄せて、国内の闘い方を駄目だなあと、外在的にしか見ていなかった、または、為す術がなかったと言えると思います。

そして、パレスチナの大義の中で、リッジ闘争が圧倒的に認められた中で、パレスチナの正義の側に立って、政治的にも軍事的にも日本の革命にも、主

観的には貢献しようと目指しました。パレスチナ解放運動の戦術や方法上の限界はありながら、その中で闘いを共に出来たこと、国際連帯を切り開いたという自負は今もあります。多元的な文化や価値の中に、グローバル世界がある以上、「正義」もまた一つではありません。それはまた、パレスチナ解放勢力がテロリストでないように、私たちが「テロリスト」呼ばわりをして、抑圧された側の正義を収奪することを拒否します。

81年、レーガン大統領になると、それまでのカーター政権の人権外交に代って、大統領令によって、解放革命勢力に対して戦争をし掛け、スパイとして潜入し、解体させる為の法的保障、テロリストとして解放革命勢力の正義性を奪う宣伝政治攻防が決定され、アフガン戦争、レバノンへのPLO解体戦争へと、80年代の反戦解放勢力側への攻防へと転じて行きました。

国際的な攻防の中で、解放運動の勢力は、ソ連や中国、東欧など「社会主義」諸国に、武器も依存していましたし、ソ連の弱体化は、全体の構図を変えつつありました。レーガンの登場に加えて、ゴルバチョフが登場し、「イデオロギーによる国際外交は止める」と宣言してしまった為に、その時から事態が反転し始めたと言えるでしょう。「抑圧された人民の闘いは正義であり、団結する」という国際連帯のイデオロギーによって、援助を受けていた解放運動は、切り捨てられることになりました。

80年代の中葉から、こうした中で、解放運動の側も問われました。米・ソのパワーバランスの上に、自己の位置を計るという均衡論が通用しなくなり、人民の中にしっかりと根を下ろすことの出来る勢力だけが、闘いを継続することが出来る保証だったのです。眼から鱗のように、人民の希望に立ち帰る闘い方へと問われました。インティファダは、その象徴です。パレスチナ解放運動は、国家外交に対して、人民外交を掲げて来ましたが、被占領地での民衆の立ち上がりの中で、解放が継続されていく力が生まれ、育ちました。奪われ続ける正義性に対し、これまでのように直反応的に対決するだけではなく、正義性を繰り返す主張し、対話し、国際的法秩序をも尊重しつつ、解放の正義性を実体化していきました。

パレスチナの解放区の政治に支えられつつ、私たちがまた、「テロリスト」攻撃に対し、ソフトウェアで立ち向かう方法が80年代問われつつ来ました。私たちの存在自身も均衡論に立っており、私たちが



岐路に立たされました。日本の人々と結びつくことで、自らを変えようと思いました。人々の中に帰る条件は、「テロリスト」として、国際攻防で縮められていく分、失われていきました。日本の側から見て、人々にとって理解されない闘いであった以上、「テロリスト」という日米政府の呼称のみならず、一般に、益々定着してしまいました。それに対抗する手段も方法もなく、自然成長的に過ごしてきたことは、私たちの敗北の事実です。

70年代のロマンと反省の上に、70年代に目指したこと、パレスチナの為に、パレスチナで闘うという出発点でなく、日本をより良くする為に、パレスチナに行った私(たち)は、「どこで闘っても同じ」という教訓と共に、「自分たちの故郷を変えよう」という思いに変わりはありません。

「テロリスト」と呼ばれ続ける一方で、私たちが「テロリスト」と呼ばない社会があることと、それは一対であることが、多元的な文明を持ってグローバルに共生する社会の証として考えたいことです。幾つかの正義が矛盾して存在することを認め、折り合いをつけていく中で、私たち自身が日本の中で、「テロリスト」でない存在へと脱皮することが、また、パレスチナの解放と連帯を大きく育てるものであって欲しいと思います。

時代を変えることが出来ず、変わってしまった結果、「テロリスト」という位置に立たされたことを自覚して、このラベルを一つ一つの人々への出会いと発言の中から、「一体誰がテロリストなのか?」と、問い返せるように、これからは生きていきます。

書いている間に、桜が花を開きました。

桜木のその老木の萌黄割れ

咲き初めの白闇に染まらず

パレスチナの新しい局面 4月14日

葉桜の桜残せし面会日

エープリルフールに君の死を聞く

桜花来よと獄窓開け放ち

風の舞見つ君を弔う

限りなき空のむこうに連なりぬ

パレスチナに友再び殉ず

エープリルフールの4月1日、月曜日に旧友の死を知りました。パレスチナの「土地の日」の3月30日に、パレスチナに連帯し、イスラエルの暴圧に抗議し、焼身自決を行ったことを知りました。彼は、72年のリッダ闘争を闘った戦士達と固く魂と志を結び合った一心同体の同志であり、リッダ闘争の30日目、5月30日までに彼らのもとに行こうと、決めていたのではないかと心に響きます。彼のことを書こうと思い、書き直しては考え、そして又破いて、今は書けそうにありません。惜別の合掌を捧げます。

パレスチナも新しい局面を丁度迎えています。シャロン政権は、「テロリストを一掃する」という口実で、自治区破壊・和平破壊を行い、3月29日には、自治政権施設も破壊しました。3月28日のアラブ首脳会議によって可決された、サウジアラビアの提案（第1に、67年の占領した全アラブ領土からイスラエルが撤退し、第2に、東エルサレムを首都とするパレスチナ国家の承認、第3に、難民問題の公正な解決を行うこと。それに対して、アラブ各国がイスラエルと「正常な関係」を構築するという内容）



を「ベイルート宣言」として可決しました。その和平提案宣言に対する解答のように、シャロン政権は「反テロ」の名のパレスチナ直接支配、自治政権の人的物的解体破壊による和平の圧殺を目論見ました。

これは、3月に中東を訪問し、アフガン戦争に続く、対イラク戦争包囲網を目論んだチェイニー副大統領の動きと無関係ではないでしょう。チェイニー副大統領が去り、米国は特使による仲介を続け、シャロンの行為を承認していました。しかし、イスラエル寄りの国際世論にさえ背を向ける、シャロン政権の無制限な人権無視の数々を、米国も無視できなくなりました。救急車に対する攻撃、学校に対する攻撃などが、国連機関によるイスラエルへの告発を受け、パレスチナ、アラブ規模の数万の抗議が、欧州を中心としたパレスチナ連帯の声となり、欧州各国政権を動かし始め、国連をも動かし始めました。

そして、4月に入ってパウエル国務長官が和平の調停を目指して、動き出しました。丁度、4月12日に起こった「自爆テロ」の為に、アラファト議長との会談を延期すると表明したとのことです。その後、アラファト議長が「パレスチナ、イスラエル市民に対する全てのテロを強く非難する」と表明し、4月14日には、パウエル国務長官とアラファト議長の会談が持たれようとしているとのことです。但し、イスラエル、シャロンの侵略と抑圧は続いているというニュースが丁度伝えられています。

こうしたニュースを聞きながら、米国の中東政策を考えています。

9・11以降、米国のポリシーメーカーの間でも、見解がいろいろあり、今後の政策をどうすべきかで、論争があるようです。米外交評議会には、共和、民主双方の中東の外交政策を策定する人々の動きが見受けられます。

9・11以降、ブッシュ大統領は「我々と共に立つのか？あるいは、テロリストの側か？」と、中間がないと示して、反テロ戦争を掻き立てて来ました。そして、その論理の延長上に「悪の枢軸」論を、安易な二元論で、自らを正義と善において、続けてきました。しかし、その裏で起こっている疑問と論争は、もっと深刻なものようです。

何故、9・11の「テロリスト」たちはサウジアラビア人とエジプト人なのだろうか？中東の親米政権が反米の政治的軍事的勢力の根拠を形成しているのではないのか？という疑問であり、問いです。

“親米”という意味では、イスラエルとサウジアラビア、エジプトの3国の政治動向の結果、中東における米国の信頼を損なっており、必ずしも、米国の民主主義を否定しない人々、アラブ知識人たちすらを反米に向かわせる根拠は、こうした3国への偏った支援にあるのではないのか？という検証が9・11以降始まっているようです。

クリントン政権の中東政策を作り、クリントンの大統領就任式直前に、オーストラリアユダヤ人から米国籍となり、その後短い間に、初のユダヤ人の駐イスラエル米国大使となったマーティン・インディックも、自分が中心的に演じた役割を含めて問うています。

1991年湾岸戦争を経て、10月マドリードの中東和平会議によって、旧ブッシュ政権は、初めてイスラエルと全てのアラブ諸国の直接交渉の条件を得ました。そして、93年1月にクリントン政権になって以降、その中心を担ったインディックたちの考えは、以下であったとのことです。

インディックによれば、「中東地域での包括的な和平交渉の好機が、今そこにある。和平交渉が成功すれば、中東の指導者たちはイスラエルとの紛争を言い訳に、各国における政治、経済的改革を先送り出来なくなる。この点でも中東和平は地域秩序にとって大きなプラスとなる。さらに和平が達成されれば、従来は軍事領域に投資されて来た資源を、改革の為に用いることが出来る。だが、アメリカが、伝統的で抑圧された社会の改革を求めて過大な圧力を加えれば、中東社会が不安定化するかもしれない。そうしたやり方は採るべきではない。政治・社会改革を強く求めれば、和平促進の努力を中断させるだけではなく、石油資源豊かな湾岸地域と戦略的に重要なエジプトの安定確保という、アメリカの利益を損なうことになる。したがってアメリカは、和平に激しく反対する勢力（イラク、イラン、リビア）を封じ込め、友好的なアラブ諸国が彼らにとって適切なやり方で、内政問題に取り組めるよう配慮すべきである」（フォーリン・アフェアーズ：バック・トゥ・ザ・バザール論座5月号）として来たことが、2001年9月11日まで続いてきた米国の政策であり、今それを要するべきだということのようです。

つまり、腐敗堕落した政権維持の為、金で解決しようとするサウジアラビアによって、原理主義の学校や教育機関モスクが世界大に拡大したこと（サウジのスニ、ワッハーブ派は戒律が厳しい）。抑圧と強権のエジプトは、人民を益々反米反イスラエルへ

と、掻き立てさせてきたこと。このことを無視しては進めないという中東政策の捉え返しを、米国としても問われているということにあります。

「和平」でなく、こうした「腐敗強権」の友国の「政治経済改革」を一義に置く限り、変者は現政権を安定させず、どのような勢力が登場するか米国にとって予断を許さないのです。又、「イラク包囲陣形」を形成すれば、この親米政権自身が人民の反対に、持ち堪えることが出来るのだろうか？ということも、3月のチェイニー副大統領の各国訪問で、練り直さざるを得ないシナリオだったでしょう。

ブッシュ政権は、物事を単純化し、単独行動主義で、アメリカの利益だけ考えて、善と悪とに振り分けて進みたいのかもしれませんが、ジレンマに陥らざるを得ません。

インディックは「改革によるカオスか？それとも腐敗の継続か？」と問い、このままでは体制崩壊は時間の問題と捉えています。そして、短期的には、反テロ共同に協力させつつ、長期的には、政治的経済的変革なしには、米国自身が影響力を失うばかりか、同盟の友好国を失う危機的なことになることを警告しています。

“サウジアラビアもエジプトも、社会に対するコントロールを緩め、リスクがあっても政治経済改革を推し進めるように、支援しなければならないのだ。市民社会の教化の為に政治的自由を認めれば、体制が安定することを、サウジアラビアやエジプト政府に判らせること、イスラムの教育の中で、反西洋的なものを除き、働く場を保証し、若い人に展望を与えなければならない”とインディックは考えています。

しかし、丁度IMFなどが、こうした構造調整で各国の実情に合わない方法を押しかけて、国内をメチャメチャにしたように、これまでのツケを、政権交代と変革なしに、改革を求める方が難しいでしょう。親米政権をどう作り出すのか？この展望を描きかねていることが、今の米国のジレンマなのです。

反イラク戦争をするには、今の親米政権は、反イラク戦線に対するバックアップ能力がないし、和平プロセスを実現するには、シャロン政権と矛盾を拡大させ、中間選挙を控えた時期にユダヤロビーとことを構えたくないし、中東の根本的解決をするには「親米政権」こそ、反米勢力形成の根拠となっているというジレンマです。

机をひっくり返すように、対イラク戦争を媒介に中東全域を戦場にして、資本主義的再編をしたいと

ころでしょうが、アメリカと共に歩む政権や勢力が、汎アラブ規模では人民や国民の力を得ていない為に、難しいのです。アメリカの中東政策を作っている人々は、こうした机をひっくり返す条件を戦略的に描きつつ、イスラエルを戦略的の友として、石油を確保しつつ平和へと、結局インディックがとらえ返そうとしてきた出発点に戻り、同じ道へと行くのでしょうか。アメリカが欲張らず自らの利益を多少減らし、反省と公正に目を向け、包括的平和への一歩を求める真の仲介者とならない限り、欧州や国連の努力も又、アメリカとイスラエルの妨害に会うでしょう。

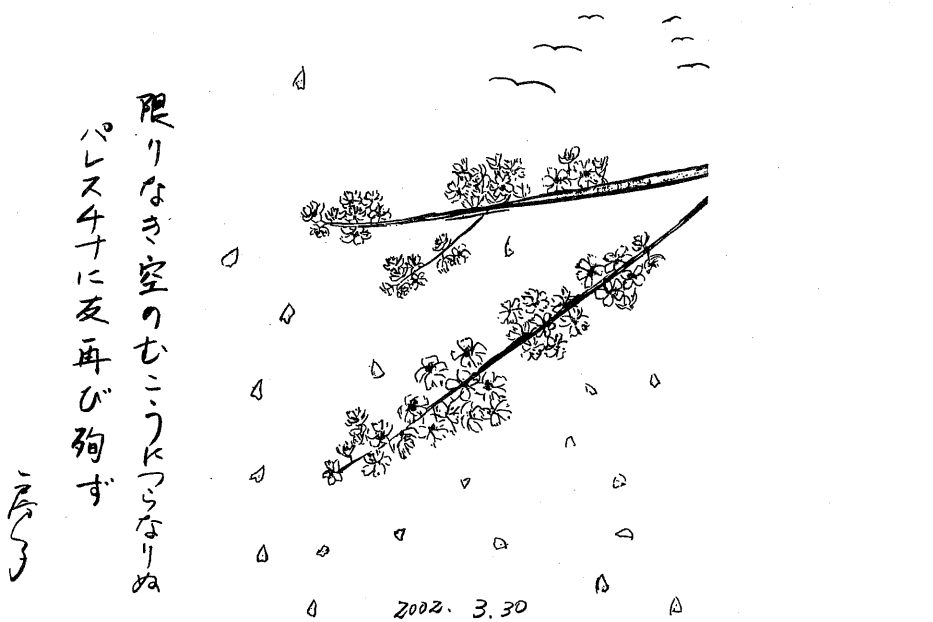
今問われていることは、イスラエル、シャロンの歯止めが無い虐殺に対する制裁、自治区からのイスラエル軍の撤退、パレスチナ独立国家の承認を国際社会が認めること、そこから、和平を再スタートさせることでしょうか。虐殺と破壊の次に、イスラエルは、パレスチナ人の分割支配を、繰り返し求めるでしょう。それは又、パレスチナ諸階層の人々の利害の違いを、民主的な手続きと方法において調整統合する中で、和平プロセスをパレスチナ自身が民主主義の実現として建国を作り上げていくことでもあるでしょう。

リッダ闘争が、1972年に闘われて、30年目を迎えようとしています。当時のシンボリックな殉教の闘いは、今、日常的な破壊力として、シャロン政権の虐殺とテロに対する抵抗の方法となって闘わ

れています。イスラエルの市民を殺して欲しくないからという思いもあるけれど、それよりも深く、パレスチナの若者に、これ以上戦術上自ら死を賭して欲しくないから、「自爆」攻撃を止めて欲しいと願っています。生き抜いてシャロンを打ち破り、パレスチナの、イスラエルの住民の共存を求めることを、若者達に求めたいからです。それが30年前闘った当時の、多くの殉教者達の願いであるだろうと確信しています。

パレスチナの5月は、激しい時節です。イスラエルの建国も5月です。パレスチナにとっての悲劇の始まりも又5月でした。日本では、サッカーで、5月は湧いているのでしょうか。82年、イスラエルのベイルート侵略下レバノン住民が抵抗戦を繰り広げていた時、ワールドカップの時と重なりました。ワールドカップに優勝したイタリアチームが、パレスチナの人々に連帯して、ワールドカップをパレスチナの人々に捧げたのを思い出します。戦争の中で、そのニュースを聞き、みんな泣いていたのを思い出します。日本で行われるワールドカップは、どんなドラマを見せてくれるのでしょうか。

私事ながら「りんごの木の下であなたを生もうと決めた」という去年の今頃出版した本が、丁度今頃朝鮮語版で、出ているらしいです。これも、サッカーワールドカップのお陰の文化交流から、生まれたものかもしれないです。パレスチナ平和を祈りつつ春爛漫の5月を描きます。



プリズナージャーナル⑩

重信房子

第14回公判出廷記 3月22日

桜の中を法廷へ

彼岸の中日、昨日3月21日には、窓の外の桜の老木が満開の花を咲かせました。その美しさに圧倒され、日々、桜日誌の歌を作りながら過ごしているのですから、優雅な暇人です。

東京の桜開花宣言と言われた同じ日に開花して、いくつかの白い花が開き、3月21日には、見事という他はない桜が咲き誇りました。

22日朝、昨日までの晴天の青空と打って変わって、花曇りの空が明けきらないうちに、起きました。6時前でしょうか。昔は夜更かしだったのに、今は10時位には寝るので、早起きです。

桜が咲き始めてからは、早朝桜日記を書いていたので、公判の日の朝も、同様に幾つか書きとめて、明け始めの朝、満開の桜を見ながら、一時を過ごします。

花曇のせいで、青空に真白に映える昨日の花は灰色に少しずつ空けていく空を背景に、ピンクがかかって、全体が徐々に浮き立ちます。昨日の春一番の中で、決して風に花びらを取られずにいた桜です。花びらが落ちていかなのを見て、桜は風に散るのではなく、花満ちて自ら時を選んで散るのだと、改めて思い知らされました。今朝もそっと昨日の風の強さに花を落とさず満開に咲く花を確認してみました。

今日は、女性6名。男性と一緒に大型バスで出発。曇空だけのお花見日和の22日、どこもここも満開の桜です。一般道を通ればいいなあと思ったのですが、今日はずっと高速を走ります。高速に乗ると、木々を間時に見れないのが残念。高速から見渡す街は、どんよりとした空の為、見通しも余りよくないのですが、隅田川の両脇に続く花の雲のような桜並木は、絵に書いたように美しい。しばらく行くと高速の隅田川の見える右手でなく、左手に、大きな木立と池、桜の美しい一角が見えてきます。いつもこの寺は、何の寺だろうとかなり広い寺院の屋根や美しい木立に気づいていたのですが、これは浅草寺かもしれません。(丁度3月23日の読売新聞に

観音の薨みやりつ花の雲 芭蕉と俳句マップに出ている、位置からすると、浅草寺みたい。)

隅田川沿いの松下電器のナショナルの広告のところで、時間と温度の表示がデジタル点滅するのですが、8時32分で、19度と点滅。え？19度。温かい春。上着を急に熱く感じてしまう。京橋から一般道に入り、銀座を抜けて、日比谷公園の脇を通ると、間近には、ピンクの大輪の八重桜が垣根のように続き、遠くに満開の桜。街中が花々を誇っているよう。

心踊る傍聴人との目線の挨拶

今日は、Y証人の証言の最終回にあたります。Y証言は、12月から1月、2月と、1回伸ばしに延びて、今回3月22日で4回目の出廷を数えます。

104法廷、13時15分。

春らしく、温度も穏やかで、上着を脱いで、セーターで出廷しました。

いつものように104法廷に入ると、手錠を取るの確認してから、傍聴席への入廷が指示されます。今日もありがとう。懐かしい顔、初めての顔、分らず名前と顔が一致せず、失礼している人も居るかもしれません。

大学の旧友たちが、いつものように多忙の中、軽やかな表情で、昔と変わらない笑顔を送ってくれる。今日は大学時代の懐かしい友、今、御茶の水の懐かしい界限で店を開いているという友人も顔を見せている。「変わらないなあ・・・」大学時代のKさん、Hさん、Oさんらは、全然老けない。Yさん、文学界の同人誌評の作品読みました。良かったです。足立さんも体調悪いと聞いていましたが、元気そうだし、旧友や関西や関東の友達の姿も見えて懐かしく嬉しい。

どっと入ってくる人々に、濃い凝縮した瞬間の目線で、挨拶を交わすことが、これだけ心踊ることだというのを、公判ということの中で、実感しています。瞬間に傍聴席の何十人もの人々と目で語り合おうとし、探し、確かめ、皆さんの一様の温かい表情にほっとさせられ、一人ではないと実感する瞬間です。ありがとう。いつも感謝したいのに、黙って目礼するだけでは、ミーハーの私には相応しい仕草ではないけれど。

前回検事側の再主尋問のあらまし

傍聴席の入廷を確認すると、裁判長は開廷を告げて、Y証人の出廷を促します。ゆっくりした足取りでY証人が入廷し、裁判官、検事、弁護士に挨拶をします。裁判官が「前の宣誓の効力は生きているので、そのつもりで」と言って、今日の証言がスタートしました。

すでに第1回、第2回を経て、弁護側の第2回と第3回目までの反対尋問で、検察側の言い分を最も主張すると、検察側から期待されていたYさんが、調書が意図的な作文であることを明らかにしていました。また、当時、71-73、74年段階のハーグ闘争以前には、組織という実態があったわけではなく、各々がボランティアで、PFLPの指揮のもとで参加して、日本人同士が横のつながりを保っていたこと、そのあり方を組織的なものへと再編していったのはハーグ闘争後になる点などが語られてきました。そして、更に、前回には、川村弁護士が和光公判のことで、重信逮捕以前にY証人に会い、話していた内容が示されていました。川村弁護士から、和光さんは事実関係を認める予定であると聞いており、当時川村弁護士に話した内容と同じ内容について、長澤検事に重信逮捕後に話したことが歪められて書かれていたことが前回確認されていました。また、端から、長澤検事が「重信を一生出すなど言われている」として、重刑にする為に調書作成を行ったことの、細かいやり取りが明らかにされていました。こうした弁護側のやりとりで、Y証人の言が検察側の意図をことごとく裏切るものになっていました。それで、前回公判の最後の30分を使って、検事側の再主尋問が行われ、怒りに満ちて、Y証人の証言の矛盾や問題を追及していました。

検事側再主尋問の続き

本日も検事側の再主尋問からスタートしました。西谷検事より「ハダードの指示で、ウィーンに重信被告人と行った時のこと、レストランで、G、Kと3人で日本食を取ったのは、事実か?」とか、「デュセルドルフでの交通違反の件、公園に車を止めていたことが駐車違反に問われた件の事実関係など、どういう条件であったのか?」、「払った金はいくらか、最終的には誰が負担したのか?」とか、反対尋問で弁護士に答えた点を、これまでの矛盾として追求と再確認を始めました。

検事「弁護士の反対尋問に対して、“翻訳作戦”には、アブハニは関係ないと答えています、誘拐は

アブハニと欧州グループの間で、出てきた話と言いましたね。」

Y証人「はい。」

検事「最初に話が出てきたのは、ドバイの頃ということですか?」

Y証人「はい。」

そして、アブハニと欧州グループで始まった話がKさんを通して重信被告に話され、日本人だけでやろうという考えもあったという、12回公判での大谷弁護士へのY証人の“翻訳作戦”の概要を理解できない為か、矛盾を探る為か、しつこく質問をしていました。

検事「Kが重信被告にどうして、いつ、持ちかけたのか?」

Y証人「分かりません。私の推測で、メンタリテュー的に、当時日本人の方がやりやすいと思ったのではないかと、アジア系で、その方が良いと考えていた。」

検事「日本人として、具体的に誰が何をやる?」、「コマンドは?」

Y証人「まだ具体的ではなかった。最終的には、自分がキャンプでやると考えていた」と、当時まだ何も形になっていなかった点を示すのですが、「アブハニは調査のみなのか?」、「誘拐の実行にも加わるのか?」、「Kはなぜ重信に持っていったのか?」、「Kが話を持っていったことに対する重信の反応は?」、「12回公判では、パリのアパートでの話として、Kさん、Gさんの話として、アブハニからの調査を重信に持ちかけることがあったのか?」など、「推測ではないのか?」と、12回公判でも推測と言っていることを問いただしていました。

検事「パリから戻ってハダードに報告した後、ハダードは行動をとったのか?」

Y証人「そのままだったと思う。」

検事「重信被告は?」

Y証人「多少は準備したという感触です。」

検事「どういうところで、そういう感触を得たのか?」

Y証人「自分が捕まる過程で。5月にウィーンからパリ会議。そして旅券とか国際免許証とか、ドイツの秘密警察にコピーされて手を引き、パリで捕まる。その間数ヶ月で、再度行くことになったことで、感じた。」

和光さんに関連して

検事「和光が欧州に行ったのは何故?」

Y証人「分かりません。」

検事「前回の反対尋問では、和光は、アブハニ系列でない動きをしたと言ったが、あなたの報告では、アブハニが中断していた。そのアブハニの指揮とは別のところで、重信、和光らが誰の指揮の下で、誘拐作戦をやろうとしていたのか?」

「長くなるが」と断って、Y証人は、アブハニも、日本人も資金が枯渇していたこと、当時、欧州も、Y、和光、重信も自立する方向を模索していたことを説明しました。

検事「自力更正の為の資金、その為の誘拐作戦?」

Y証人「それは別に誘拐でなくても・・・。」

検事「資金を得て、自力更正ということですね。」

Y証人「はい。」

検事「和光はアブハニ系列でない動き方をしたことが、それ以前にあるのか?」

Y証人「分からないです。」

検事「和光がドルを持ち帰り、ハダードが突っ返すよう指示。重信被告は、和光が持ち帰ったのにどういう意見?」

Y証人「革命組織として、こういうことにタッチしたくない、大儀に反する、返せということで、何もせずに返すことになった。」

検事に「精巧だったのか?」、「両替しても大丈夫か?」、「技術的には?」と聞かれて、Y証人は精巧で両替しても大丈夫のものと言っていました。

Yさんのパリ行きについて

検事「弁護士の尋問で、Y証人は、『重信が、和光が欧州から帰って来てこう言っているという内容を手紙に書いた。和光が嫌だと言うので、重信が書いた』と言いましたね。」

Y証人「そうです。」

検事「何故、和光が自分で書けばいいのに、重信が書いたのか?」、「Y証人が行くからYにぶつけてくれと言う依頼書を書いて、パリで取られ文書ですが、Y証人は説明を受けていたのか?」、「重信が和光から引き出して書いたというのは、“翻訳作戦”の話ですね。」

Y証人「覚えていない。」

検事「どういう問題点を、Y証人にぶつけてくるのか?」

Y証人「よく分からない。」

検事「パリに行く時点では、日本人だけでやることになっていたか?」

Y証人「判断できるほど、進んでいない。その後、



自分はどこかに行っていて、“翻訳作戦”について知らない。ドル返却運搬には期限があり、急なので、出かけた。“翻訳”は、その進展を見てくる、調査継続するという事だけ決まっていた。」

検事「調査継続という認識?」

Y証人「そうです。」

検事「Y証人にぶつけられる問題を思い出せないか?」、「鈴木とY証人が名乗ると説明を受けていなかったか?欧州グループの人は、あなたを鈴木と思っている。あなたが鈴木と名乗るのだよと言われていないか?」

Y証人「言われてない。書簡のやり取り上の名前ではないのか?」

西谷検事は、Y証人が逮捕される前、パリに行く任務内容を整理し、①ハダード指示の文書運ぶ、②重信の手紙を運ぶ、③偽ドルを返す、④“翻訳作戦”の問題をぶつけてくる。その他の仕事は?と聞きます。Y証人が期限の決められていたドルの返却が第1の仕事だったと言うと、検事は、その他に“翻訳”で証人がやるべきことはなかったか?と問い続けます。

「あなたが行って調査するのではなかったのか?」、「準備の為の交渉するのではなかったのか?」、「重信の手紙は誰に渡すのか?」、「偽ドルは山本に渡して、“翻訳作戦”の資料を受け取るのではなかったか?」と、Y証人自身が弁護士尋問で、鞆の中身を知っていたことなどを語ったことから、逆襲に出て、Y証人を証人というより、“翻訳作戦”の当事者として追求しようとしています。

「武器のメモ、飛行機の中で書いたというメモ紙、パリで押収されているもの。裁判長、右肩に⑤の番

号のあるこのメモを示します」と、西谷検事は、コピーされたメモを証人、弁護士、裁判長に、後で証拠申請するとして、示しました。そして、「これは証人が書いたメモではないか?」と問い、証人が書いたと思うところに丸印を付けて欲しいと示しました。

早速、弁護士からコピー2枚が私にも見せられました。幾つかの小さいメモを2枚のA4の紙にコピーしたものです。これは、パリで押収されたものの一部のコピーで、大谷弁護士は、その右上の⑤という番号自身も押収時にあったものなのかどうか? コピーの元は?と、介入しました。西谷検事は「コピーのコピーしかない。原本はない」と言い、コピーされたメモである点を明らかにしました。Y証人は、2枚のA4の紙の中を見ながら、「この部分はドイツ語のようで私ではない。私が書いたと思うのは、武器のこの表示です」と、○印を付けました。

ここにきて、検事側の意図がはっきりしました。検事側証人として、出廷してきたはずのY証人が、もし検事に従順であれば、公判に持ち込むことを没にしたであろうメモのコピーを持ち出して、Y証人に他のことだとして追及できるのだぞと言わんばかりに、いくつものメモ書きされたものを示しました。

その上で、他のポイントに移りました。

リビア訪問のこと

検事は、「リビアの革命記念日に重信が招待されていたのはいつか?」と聞き、「Y証人が、パリに出発する前に決まっていたと言うが、実際行ったのかどうか?」

Y証人「本人から行ったと聞いたと思う。」

検事「釈放交渉で行ったのかどうか? 8月には、釈放されている。その釈放後に、革命記念日まで、重信が残っていたかどうか? 釈放の為に来っていた庄司弁護士はどうしたのか? 革命記念日までリビアに残っていたのか?」

Y証人「そこまでは知らない。」

検事「8月20日にはパリでKさんらの一斉取締り中。そういうことがあっても、重信はリビアにずっと居たのか? 悠長な気もするが、」ドバイの救援が終わって、釈放されて、その後革命記念日までの間、仲間がパリで取調べを受けていても、リビアに滞在していたのか?」としつこく追及します。

Y証人「この釈放交渉を通して、PFLPとリビアの関係の改善に努力し、当時、重信さんがそれを重点化していたから、革命記念日まで居たはずだ。」

検事「Yさんは、西谷にどう言った? 革命記念日

に招待されて、マントを貰ってきてくれたと言ったが、ハーグ事件の前に行けなかったと言ったのではないか?」

Y証人「えっ! そんなこと言いましたか?」と不思議そうに、「革命記念日に行けなかったと言っていない。カダフィーには会えなかったと言ったと思うが。」

検事「いつからいつまで重信はリビアに居たのか?」

Y証人「弁護士がいらっしやってつかまらなかったり、行き違いとか、PFLPの人がオフィス開設準備とか、自分は捕まってしまったので、正確な日付は不明。」

検事は、「ずっと重信がリビアに居たわけではないのでは?」と、追及しました。Y証人が、ベイルートからリビアに、ビザの関係での手続き上の点を話していることを、重信が釈放交渉から革命記念日までの間、リビアを出入りしたと決め付けたい様子。リビアを出入りなんて出来ない当時の条件をY証人が説明するのが、検事は認めようとしませんでした。

ハーグ闘争後のシリア滞在の話

検事はその後ハーグ闘争後のシリア滞在の話に入りました。

「シリアの簡易刑務所」というY証言が、その後「上級将校クラブと言っているが、何故か?」とか「シリアで和光が怒った相手がカルロスなのかミッシェル・ムガベルなのか?」と、Y証人の矛盾追及と今後の他の同志の公判の為に聞いている様子。

その上で、「戸平、西川がハーグ事件で、自白したのは、いつ知ったのか?」

Y証人「1975年3月逮捕以降、新聞で知った。」

検事「重信にハーグで逮捕状が出ていたことは、いつ知ったのか?」

Y証人「長澤検事が尋ねてきて知った。」

検事「ずっと以前から知らないのか?」

Y証人「覚えていないが、本富士のことが頭にあった。」

検事「ハーグのことは?」

Y証人「ありえないと思った。」

検事は、「戸平、西川が自白総括したことはあったのか? 二人は虚偽の自白をさせられたという総括か?」とか、「戸平、西川の自供が、当時、アラブでどう扱われたかを探ろうとしていました。」

Y証人は、総括は事実関係に触れるのではなく、思想的な30年生きてきた膨大な思想総括文書だと

答えました。

更に、戸平らの調書のコピーは、入手していないか?とか、聞き出そうとしていました。

川村弁護士が前回聞いた点の追及

「長澤検事から、川村弁護士に会った後、『川村弁護士から取調べでどう答えているのか?と聞かれなかったか?』と聞いたら、『尋ねられていない』と答えたが、反対尋問では、川村弁護士に答えて、『何が問題か聞かれた』と言っているが、どっちが正しいのか?」とか、「Y証人の取調べの為の出張支払いは、国税と答えているが、Y証人が立て替えて、後に銀行振込ではないのか?」とか、Y証人の矛盾点を追及し、Y証人の答えが今度は信用できないのだという風にして、西谷検事が終わりました。

西谷検事の山場は、例のメモコピーの突然の表示でしたが、それ自身が、証人に大きなインパクトになるものではありませんでした。むしろ検事側に居たはずと思いついていた（これは長澤検事の勝手な作文の為の誤認）Y証人の立場が違っていたので、逆に私たちの側にY証人を追い込むような仕打ちです。Y証人は戸惑っていたでしょう。

検事の弁護士追及への反論

続いて村瀬検事が「これで公判は、4回目になった。2回で終わる予定が、弁護士の質問の時間が延びたのか?」と言われ、「双方に検事、弁護側の必要で延びたのしょう」と、Y証人が答えると、「弁護士から、今日で終わる、今回で終わると延びたが」と、弁護士によって引き伸ばされてきた事情を示しました。

西谷検事は、挽回しようとして再度立って、「調書を長澤検事のところで、見せてもらってないと言うが、中身は聞いたのか?」

Y証人「そうだったと思う。」

検事「現在調書は手元にあるのか?」

Y証人「あります。」

検事「いつ入手しましたか?」

Y証人「2週間程前。」

検事「その時が最初か?」

Y証人「口頭では。」

Y証人が調書を手し、後に出てくる上申書を書いたことが、Y証人攻撃の引き金になっていたのを、この辺まで来て、私も理解しました。弁護士から調書を送ってもらったことを問題として、弁護側が証人の妨害をしているという風に言いたかったのでし

ようが、Y証人は、「前、西谷検事から公判が途中で終わった時、『今日みたいだと、調書の内容と証言が違う』と言うので、西谷検事に『調書を見せて欲しい』と私は言ったのですが、『検察からは、見せられない。弁護士からなら見せてもらうことが出来る』と、西谷さんが言ったので、その段階で、弁護士に見せてもらった。余りに内容がひどかったので」と反論しました。

西谷検事「上京されたのですか?」

Y証人「郵送です。」

西谷検事「自分の検面調書か? 他人の調書は?」

Y証人「他人のは無い。」

検事「内容は聞いてないか?」

Y証人「内容は、他人のは、説明してもらっていない。前に長澤検事からのみ、他人の調書を見せてもらった。自分が弁護士に、他の調書を説明した位です。」

検事の考える、弁護士の意図で妨害されているというより、検事側のやり方で調書を読みたくなり、上申書を書くようになったことを語りました。

すでに2時50分になって、やっと検事側は追及を終えました。裁判長は、時計を見て、30分の休憩を提案しましたが、弁護側は、時間が足りなくなるので、15分の休憩にして欲しいと言って了解され、休憩に入りました。

弁護士の反対尋問

休憩後、渡辺弁護士の方から、Y証人への質問が始まりました。

調書の矛盾、不自然な内容などのポイントを早口に確認していきました。長澤検事が本を持ってきて、Y証人自身知らないフルネームをどンドン書きこんだこと、ツパマロスの例え話が、何月から何月まで、タイ、ドイツ、イタリアなど調査したことになっていること、バズーカ砲などという記述など、これまでも指摘された点、それが調書として書かれたことを知っていたのかどうか、など質問しました。

また、最初の頃の調書に、「カルロスと和光を重信が引き合わせた」という供述があり、それがいつか消えていることも気付いていないなど、調書自身の信憑性を問うポイントを早口に聞きました。

更に虎頭弁護士が、シリアの空軍刑務所で、和光さんが怒っていた対象、カルロス、ムガベル、アブハニの関係などを聞きました。ムガベルの役割、ハ

一グ作戦時、仏大使館近くで、陣頭指揮をカルロスが取る予定だったこと、カルロスが総指揮で、日本人が大使館占拠して、人質確保し、指令は外からの指揮の予定だった点が語られました。

虎頭弁護士「身代金要求、実行犯の脱出方法を本来は、誰がやる予定だったのか？」

Y証人「カルロス。」

また、当時の状況で、和光さんがアブハニにも怒っていた点については、「カルロスは、パリ本拠地、アブハニが命令し、地下はムガベル、和光の3人。和光さんが責任持ってやるといったのに、2人が拒否し、アブハニに抗議したが、受け付けてくれない。アブハニは3人の中で確認してやれ、指揮官に従えと、討議できない。アブハニに対する抗議というか、心境を語ったことがある」と、Y証人が答えました。

虎頭弁護士「和光はアブハニと話せる関係にあったのか？」

Y証人「3人でチームを組めと言われていた。アブハニと話したい時は、どうすればという意味では、丸岡とY。アブハニは丸岡とかYには、耳を貸すので。」

虎頭弁護士「和光は重信についても怒っていたのか？」

Y証人「対等に話できる関係を作っていないことで、怒っていたと思う。党的関係を、丸岡さん、Y、重信さんとか、古い人がちゃんと作っていない」と言う和光さんの怒りといわれるものの説明が為されていました。説明されていた点は、和光さんがこういうことになるから、自分に任せるといったのに、カルロスらが拒否して、実際には、日本人のイニシアティブですべてやることになったことが、怒りの原因だと語っていました。

また、別の話として、「当時重信が、組織のリーダーだったか、長澤は聞いたか」という虎頭弁護士の質問に、「長澤さんからは、聞かれていない。端からそういうところで出発していて、改めて聞く耳も無い。当時の実情は、恥ずかしい話、綱領規約も無い。集まっている人たちは、出身母体ばらばら。仲間、友達っぽい感じで、日本国内の革命を目指すグループと日本革命に関心無いグループが混在していた」と、当時のことが語られました。そして重信が「困ったことがあれば、私にとっては頼りになる存在だった」と語り、調書の中で、和光が重信に怒っていたという点について、「PFLPの責任者に文句が言える状態にして欲しかった」ということだった。調書の真中を省略して、党的確立問題で起こっている

のに、武器とか調書、ランディングの3点にすり変えていると思う。長澤検事の立場に立てば、重信は指導者というのがあり、それを組み立てる回路がそれしかないという事だろう」と答えています。

総括会議について

虎頭弁護士「重信は謝罪なり、自己批判なりしたのか？」

Y証人「1971年から数年間の総括を提出して、党的結集、政治統一になっていない点を謝っていた。」

虎頭弁護士「『武器調達や、ランディング問題に関しては、相手のあることなので』と言っていないか？」

Y証人「それは無い。」

虎頭弁護士「調書には『相手のあることなので』と、そういう記載がある。」

Y証人「よく気付いていない」など、長澤検事の頭で考えられる推察に基づいて、戸平、西川調書を駆使して作られた調書の矛盾が逐条的に示されました。

検事側の尋問への反論的質問

変わって大谷弁護士が、検事側の今日の尋問に関して、西谷検事への反論という形のポイントが質問されました。

大谷弁護士「パリでの交通違反で、最終的に税金を負担したのは誰か？」

Y証人「よく覚えていないが、重信さんだと思う。」

大谷弁護士「(検事側が示した2枚のメモについて)、これはメモの裏表のコピーではないのか？」

大谷弁護士「アブハニの手紙3通は、“翻訳”に絡むものではないか？」

Y証人「まったく違う。」

大谷弁護士「リビアの革命記念日に招待されていることとドバイ事件の救出について、西谷検事の質問に、リビアを出入りしたのでは、という風に答えているが、出入りしたのか？」

Y証人「6月くらいパリから帰って、弁護士とうまくドッキングしていけるかどうかということで、という点で答えた」、「一度リビアに行って、出てくるのはかなり難しい。」

大谷弁護士「西谷検事が自分が聞いたら、ハーグ事件の前で、ごたごたがあったので、行かなかったと言ったのか？」

Y証人「覚えていない。言っていないと思う。」

大谷弁護士「74年11月頃の会議は、何を目的とした会議ですか?」、「“翻訳”総括と言われる、第二次建軍運動の総括会議、ハーグの総括だけなのか？」

Y証人「71年、リッダから総括をやること、長い時間かけて、任務分担して、綱領、数ヶ月で、継続会議だった。任務分担があり、私は逃げていた為、和光さんが軍事部門の総括、丸岡、重信、足立が綱領、規約的作業をやっていく会議だった。」

大谷弁護士「ハーグの会議を踏まえた後の組織図、戸平さんが昔、図にしたものを見て貰ったが、この絵図で正しいのかどうか?」、「政治、軍事、組織の3委員会制で、トライアングルのピラミッド型ですか？」

Y証人「政治委員会は、総括を踏まえて、綱領規約の作成準備委員会であった。政治委員会メンバーは、重信さん、安達さん、丸岡さん。」

大谷弁護士「戸平図には、和光さんが入っているが。」

Y証人「和光さんは、政治委員会ではなく、軍事委員会のキャップだったと思う」と、戸平図面の誤りを指摘しました。

大谷弁護士「重信さんが指導性を確立するのは、いつだと言えますか？」

Y証人「77年暮れ位。」

大谷弁護士「それまでは、指導者で無かったと理解していたのか? どうして?」

Y証人「第二次建軍運動総括を始めて2年位で、奪還闘争などで合流した人と、綱領規約討議などあった。収集できなくて、膨大な資料とか、最終的に治めたのは重信さんだった。」

大谷弁護士「戸平、西川さんはベイルートに居たことはあるか？」

Y証人「それまで、2人はベイルートに居ず、詳しくないこと、ベイルート日本人会を知らない。」

大谷弁護士「74年11月総括会議というのが、在ベイルートの最初の会議と窺ってよろしいか？」

Y証人「はい」と答え、74年11月が第二次建軍の為の始めての会議らしい会議であったことを説明しました。

Yさんの上申書について

大谷弁護士「この間、公判に出て話が違う、おか

しいので、調書を見たいといって、私から送られ、上申書を準備してきたということですが、一部ですか？」

Y証人「三者に。裁判官、弁護士、検事に準備しました。」

弁護士「何の為に？」

Y証人「自分の本位が調書に反映されていない。このまま判決されるのは困ると思った為です。」

弁護士「38ページにも及ぶもの。間違い無い真実を書いた? どうしてそこまで長澤検事に事実とは違うと思いつながら反論したりしなかった、という一番の理由は?」

Y証人「時代が変わったということがあった。言っていないことを何故反論しないのか? 正義を曲げても喋る、自分の利益と現状の生活を守りたいということ、すでにあらゆる分かっていることを追認していることなので、喋ったことで影響無いだろう。基本は、他人の裁判ということで、他人事のように取り調べに接した。重信さんの判決に迷惑がかかったら、本意ではないということで、上申書を書いた。検事に話したら、法律的には、上申書を証人が出すこと認められないだろうとのことだったが、自分に不利益がくるだろうことも含めて書いてあるので、是非提出したい」と、熱意を込め静かに語りました。

裁判長の質問

その後、再度幾つかのやり取りの上で、裁判長からの質問がありました。

裁判長「今回、検事から表示された⑤とあるメモに書かれているアブフェラスというのは何ですか？」

Y証人「ベイルートに行ってから、教えてもらった先生の名前です。」

裁判長「シュタイエルとは何ですか？」

Y証人「ポーランド製の25から40連発のピストル型のマシンガンの名前です。」

裁判長「カルロスはどこの組織に属しているのか？」

Y証人「どこにも属してなくて、自分のベネゼラの仲間内で、パリ中心に活動していた。」

裁判長「ミッシェル・ムガーベルは？」

Y証人「この人は、レバノンの武器とか地下平坦をあずかっている武器商人。」

右陪席裁判官の質問

最後に、右陪席裁判官が聞きました。

裁判官「カルロスとミッシェルの上下関係は?」

Y証人「ミッシェルが上です。」

上下という関係について、Y証人は、「アブハニが徴用しているところで、どちらが信頼があり、経験があるかという意味で言った」と、説明しました。

裁判官「どこがハーグ作戦の組織責任を負うべきなのか?」

Y証人「PFLPの国際作戦部局が負うべきなのだったが、党籍剥奪状態で。」

裁判官「あなたは、首謀者がアブハニと言ったが、シリアで、『重信が何もしない。自分だけが苦労した』と和光が言ったと言っていたが、アブハニが頂点に立つということと、重信が何もしないとすることを、どう理解すべきなのか?」

Y証人「命令を受けたアブハニは、受け入れない、分からないこと、相談できないことがあった。アブハニのコマンドの将棋の駒で、不満があった。」

裁判官「交通違反の根拠は、賄賂なのか、罰金なのか?」、「長澤検事に調べられた時の重信被告への感情は?」、「自分のことは不利益にならないようにという答え方で、無責任に聞こえるが・・・」

Y証人「無責任だったと思います」と真っ直ぐに見て答えました。

裁判官「公判の証拠に使われると、判っていたのではないのか?」

Y証人「深く理解していませんでした」と、答えて、一応全ての再質問が途切れて、時計を見ると、もう5時間際です。

後半、弁護士が早足で聞いていた点は、上申書で書かれていた内容の一部だった、ということを知りました。その上申書の扱いはどうなったのだろうか?検事の尋問、公判への出廷の上に、苦い反省を込めて、Y証人が書いたという上申書が公判に受け止められるのでしょうか?

閉廷の時

「それでは、証人は結構です」という裁判長の声に、Yさんが立ち上がり、裁判長、検事、弁護士の順に挨拶をします。弁護士の方に向いた時、眼を合わせて挨拶をしました。私は眼鏡なので、よく表情を伝え得ないかもしれませんが、Yさんの瘦せて深く憂れえている様子が判りました。

アラブでも皆いつもそうだったけれど、失敗はある。失敗の中から、正していくということの中で、私たちは進んできました。いつかまた会うことがあり、話を交わすことがあるかもしれない。そんな気持ちで、目礼しました。Y証人は、傍聴席の知った

顔に微笑みながら退廷しました。

次回、4月24日の日程を告げ、閉廷が告げられて、傍聴人が退廷を促されました。懐かしい友が多いので、思わず「ありがとう」と、声をかけてしまいました。一人一人にもっと感謝を伝えたいのに、皆の優しい励ましの合図や笑顔を刻みつつ、感謝。私の為に迷惑を受けた人々が一塊になって、応援してくれるのが胸痛い。皆職を失ったのではないかと心苦しい。

地裁からの帰路に

5時過ぎて、104号の部屋を出て、5時50分に地裁を出ると、雨。

あれ!雨。遅いので、マイクロバスに女性2名だけの帰り道。夜桜も月が無いので、暗くて見えないし、雨の中を混んで徐行しながら、高速をゆるゆる進みます。満開の桜の日、傍聴に来た友達は、みんな傘の持ち合わせが無くて困っていたのではないだろうか・・・。

今日で、Y証人は終わりか・・・などと、まだ公判の余韻を振り切れずに、雨の中帰舎。獄の部屋に戻って、桜を見ながら、雨の中でも散っていないなど、桜を確認して、少し安心。部屋には、差し入れのガーベラ、かすみ草、アリストロメディアが待っていました。

Y証人が良くも悪くも語ったことの中で、検察側も、トランプのゲームみたいに隠している押収品を出して来たりしている。真実は一つしかないけれど、どこまでそれが通用するのか? Y証人の語った長澤調書での検事の有様や、書かれた作文で、「ありもしないことが調書になる」ことに驚き、怒り、どうしたって真実はもはや無理なのだと思ってみたり・・・。でも、Y証人がその中で、今日まで示した姿勢を受け止めながら、私も出せるところは出して、反論の機会を得たいと思います。

今回は、裁判長らの交代によって、更新手続きとしての意見陳述を、Y証人出廷で伸ばしてきたのを行う法廷になります。Y証人の上申書を読み、これまでの公判調書を踏まえて、意見を準備しようと思います。そして、次回15回目は、その意見陳述の機会と共に、作文の主、長澤検事の出廷です。私も2000年1月に入って、3回目の逮捕の時の検事であり、また、例のS調書をジグソーパズルで作った人でもあります。事態を暴露された今、どんな顔をして来、どんな論理で言いつくろうのか?注目で

読者からの声

非対称戦争下の政治と金のスキャンダル

カラス天狗

つぎつぎに発覚するスキャンダル

またぞろ、政治家とカネを巡るスキャンダルが日本の政治課題の中心に躍り出てしまった。加藤紘一元自民党幹事長、辻元清美前社民党政審会長の二人はすでに議員を辞職、田中真紀子前外相にも公設秘書にからむ疑惑、井上参院議長公設秘書の公共工事受注成功報酬疑惑なども浮上、今後どれだけの秘書がらみの不正が明らかになるのか。さらに、共産党が公表した官房機密費の与野党議員へのばらまき疑惑にいたっては、以前から噂されていたこととはいえ、内容のあまりのわい小さに唾然とさせられる。例えば、PKO協力を巡って論陣が張られていた91年11月、公明党幹部3人に160万円分、同党参院議員に100万円分、民主党幹部に53万3千円分の背広代が支払われていた。背広代がPKO協力法に化けたと考えるとなんとも情けないというか、やりきれないというか…。いまのこの時期、本来ならば国内的には有事3法案、マスコミ3法案などで「国論」を二分するような状況が作り出されていなければならぬはずなのに、主役が脇に追いやられてしまったかのようなのである。そして、有事関連法案はろくに議論されないまま4月16日に閣議決定された。この問題は後で取り上げることにして、先ずスキャンダルの件である。自民党がらみのカネにまつわるスキャンダルはこの党の本質そのものを表しており、別の機会に取り上げることにして、今回は辻元前議員一社民党の秘書給与不正受給問題について考えてみたい。

「告発」は予期できなかったのか

ほとんどの方は御存じだと思うが、辻元疑惑を週刊新潮に「告発」したのは旧社会党員として長年議員秘書を務めた現民主党参院議員秘書であった。彼は辻元前議員ら土井チルドレンと呼ばれる若手議員の台頭に「(社民党が)乗っ取られ、めっちゃめっちゃになる」「古参職員(注:議員ではない)の居場所がなくなる」と危機感を募らせていたという。週刊誌情報によれば、社民党内の確執を反映した告発文書や怪文書の類いは以前から出回っていたという。詳細に事態を追い掛けてきたわけではないので重要な事実を見落としている可能性は否定できないが、

上記の事柄からでもいくつかの疑問と問題点を読み取ることができる。先ず疑問点から。辻元前議員は社民党内の確執に関連した告発文書の存在を知らなかったのか。自らの秘書の給与の処理法に問題があることを近い人から指摘されていたにも拘わらず、なぜ放置したのか。まわりもやっていることと言ったらしいが、それが追求材料にされることを予想しなかったのか。彼女はNGOでの活動を土井・社民党党首に認められ、社民党の議員になったのであるが、自分が政府・自民党は言うに及ばず、労働者本隊主義者達から排除すべき対象と考えられている存在であることに思い至らなかったのか。それにしても奇妙なのは告発した秘書の「危機感」である。昔の仲間の「窮状」をなんとかしたいとは一体どういうことなのか。異質な者の存在が「乗っ取り」であるというのなら、寄り合い所帯の民主党は旧社会党員からすればまさに乗っ取られつつあるのではないのか。他人の心配をする前に自分の存在に危機感をもつべきだろう。

55年体制の擬似対称性

問題点は社民党というより、戦後日本の政党政治のあり方そのものだろう。旧社会党が企業から多額の献金を受けることのできる自民党と同様のスタイルで政治を行うことは、財政基盤が貧弱な分だけ大きな矛盾を抱え込むことになる。

それが96年の社民党分裂をきっかけにさらに拡大してしまった。議員の減少で余る秘書。党勢衰退によって秘書への転身などを図らねばならない党本部職員。そのために、さらに余剰感を増す秘書集団。小さなパイを分け合うために生じた「名義貸し」の方法もここに起因している。そして、この手法や家族を公設秘書として登録することなどで活動資金をつくり出すほかはない若手議員。彼等が闘わねばならない土俵は、東西冷戦構造を外枠とした疑似二大政党政体制=55年体制下、潤沢な資金を持つ自民党が設定したものであり、当初より非対称な存在であったのだ。したがって、自民党と類似な形態を探りながらこれに対抗しようとするれば、そこには様々な落とし穴が待ち受けている。カネの問題もその一つである。官房機密費のどれだけが野党対策に使われ

ただろう。この種のカネを受け取っていて、本当に自民党政治と対決できるのか。「反戦」だの「反安保」だの「反自衛隊」だのといったスローガンは対策費を引き出す名目ではないかとさえ思えてくる。

秘書という利益集団

こうした対策費の動きは議員のみならず秘密集団も知っていることと思われる。

筆者は議員秘書の実態はよく知らないが、超党派の協議会なるものが存在するらしい。それは所属党派から相対的に自立した一つの利益集団を形成していると考えてもよいだろう。冷戦構造崩壊後、この傾向は非常に強まったと思える。このことは、原口民主党議員の秘書が自民党旧官派派、分裂後の堀内派事務所ですら9年間にもわたって非常勤でアルバイトをしていたことが発覚した折り、関係者は手が足りないで顔見知りだから手伝ってもらったという意味の発言をしている点からも伺い知ることが出来る。そのような秘書集団の中でどのような情報が行き来しているのか。党派を超えたある種の「謀略」の背景とならないという保証はない。それが辻元問題で作動しなかったかどうか。すべては闇の中に消え去ったことであろうが…。

いくつかの点を結んでみれば…

一連の秘書がらみのスキャンダルの登場人物のなかで加藤、辻元前議員と田中元外相の3人こそ隠されたターゲットだったのではないかと。彼等3人はいずれやってくるであろう政界再編の目玉となる可能性は強かった。その芽を摘んでおくというのが今回の事態の背後で動いた者達の意志だったのではない



か。

ここ3~4年、反グローバリズム運動のターゲットになっていて、日本のマスコミでもかなり目にする機会の増えた世界経済フォーラム=ダボス会議であるが、5年くらい前(この年、日本経済新聞が数行ほどの記事でダボス会議の開催を報じていた。内容についての記述は一切なし)までは少なくとも日本のマスコミでは全く取り上げられることはなかった。したがって、ダボス会議の存在を知る日本人は極めて少なかったところ、一人の、当時としては無名に近い政治家が招待されて、この会議に出席した。翌年、彼一細川護熙一は政界再編の中心人物となり、首相に就任する。このとき、日本の支配層の中で政権再編のベクトルが急成長したのではないかと考えている。支配層といっても決して一枚岩ではない。内部では様々な向きのベクトルが存在し、それらは暗闘を続けていて、ときには自民党内政争として表面化することもある。ある意味では「左右」の対立より激しい面を持っているだろう。

さて、この小論で多くとりあげてきた辻元前議員であるが、2000年のダボス会議の「明日の世界のリーダー100人」の一人に選ばれている。辻元前議員をダボス会議につれていったのは加藤前議員だという情報もある。そうだとするならば、この方向の政治の流れが今回のスキャンダルで完全にストップしたことになる。さらに、田中元外相の秘書給与疑惑の展開次第では政界再編はあったとしても、旧来の構造を温存・強化する方向に進むだろう。

以上、政界再編という観点から、今回のスキャンダルの背景的なものを考えてきたが、それ以外の側面も存在する。それはこの間、週刊新潮や産経新聞が執拗にキャンペーンを張っている、辻元前議員と(旧)日本赤軍との関係である。NGO出身の彼女に(旧)日本赤軍の影があることを匂わすことによって、支配層にとって都合の悪いNGOを同様の手口で排除することを目論んでいるのかもしれない。最近、NGOによって打撃を受けた支配層を形成しているある潮流とは…。ところで、NGOといえば、真面目な市民ボランティアというイメージが強いが、かのジョージ・ソロスもNGOを主宰していて、そのメンバーの多くが米国・CIAの元エージェントだという。また、地球温暖化防止京都会議では、各企業のNGOが自企業に不利な決定がなされないようロビー活動を行っていたという。NGOといっても結構幅が広い。ムネオにどう喝をかけられている人々ばかりではない。

秘書とカネを巡るスキャンダル騒ぎの陰で

誰もが気付いていることであるが、秘書とカネを巡る一連の報道洪水の中にムネオ問題、有事関連法案が隠れてしまった。こういう状況下、4月16日有事関連3法案一武力攻撃事態法案(新規立法)、自衛隊法改正案、安全保障会議設置法改正案一が閣議決定された。法案は、攻撃が予測される段階でさえ首相に自治体指示権など強い権限を与え、防衛出動した自衛隊に私有地の強制収用、家屋撤去を認め、物資保管命令に従わない民間人に対して、罰則を設けるといった内容を含んでいる。これにはさすがに与党内部からも慎重論が出ている。

個別の条項の検討等は別の機会に譲ることにして、一点だけ指摘しておきたいことがある。法案をとりまとめる段階で、外務省は日本国内での米軍自由移動の法改正を見送っている。外務省の問い合わせに対する米国側の主張……「日本の法律にしばら

れているわけではない」……つまり、米軍に必要なが生じれば、日本の法律や日米間の条約に関係なく行動しますよということである。これが日米同盟の本質である。冷戦構造の崩壊は米国にいろいろな局面で本音を吐かせている。新ガイドライン安保(これによって、自衛隊の統帥権は実質的に米国大統領がもつことになった)成立後、共同軍事行動に関する議論を求めて渡米した自衛隊制服組を、米国はなにをしに来たのだとばかり冷たくあしらひ、追い返している。これらの本音が報道される機会はほとんどない。

筆者は個人、団体が何を主張しているかではなく、何をやっているか彼、彼女、彼等を判断している。また、一つのグループの中にも多くの異論が存在していることも承知している。異論が時として対立物となることも。だから足元はしっかり固めなければ……。蛇足ながら最後に一言。

途方にくれる

僕らは、今、パレスチナで行われている殺戮を直視しなければならない。僕らの無関心は、この殺戮を、人知れず進行させる。僕らは、利害関係を排除した「策」を見つけ出さなければならない。これ以上、誰も傷つけても、傷ついても行けない。

7 Apr. 0 2

S. N. (大阪)

2002年3月30日、「土地の日」国際連帯集会宛てに、

パレスチナから寄せられたメッセージ

- ① ビル・ゼイト大学は封鎖され、通信網も切られている。〇〇教授が元気であるのかどうかも、消息が断たれて不明だ。勿論、電話はイスラエルに全面的に切られていて、通信できないでいる。
- ② パレスチナ人は、今日を「闘いの日」として、全土でイスラエル占領軍と闘うことを決意した。私たちは、皆、意気高く元気に頑張っている。どうか、パレスチナに正義と平和が実現できるように、世界中の皆さんが手に手を取って連帯を強化してくれることを望む。
- ③ 日本の友人たち、「グッド・ラック！」

2002・03・30 ラマラ民衆委員会

「オリブの樹」への一言

マラハバツ(アラビア語・今日は)! 毎号楽しませてもらっています。

1. 山田さんの「私小説」にも注目。昨年『文藝春秋』新春特別号の手記は、新聞広告で見て、すぐ取り寄せ読みました。「テロリスト」キャンペーンの中で、勇気ある方だなと思いました。

ところで、東拘の被収容者数は、2000余人です。ついでに、私も執筆している本を推薦。『実録! 刑務所のなか』(宝島社文庫)に、東拘紹介あり(近いうちに2刷が出るらしい)。

2. 6号の片岡さんの文章、「ユダヤ主義」の件は、その通りと思います。ただ一部シオニストがナチスと裏交渉していたのは事実のようです。メイ君の文章は見えていないので、何とも言えません。

話は飛びます。高津高校の先生をされていたと聞いて、私の高校にこういう先生がいたら、生徒として処分撤回闘争を私はやったかなあ。私は、高津と昔、姉妹校だった清水谷に居ました(赤軍の丸岡の為に「偏差値」が落ちたと恨まれている)。清水谷は、社会党系と日共系の教師が強くてリベラルな校風でした。今、そんな高校は残っているのでしょうか。埼玉の所沢高校は、数年前まで頑張っていました。パレスチナ問題、ユダヤ人左翼とアラブ人左翼の連帯が拡大することが、混迷からの脱出、二国家共存になるはずなのですが、先が長そうです。

3. メイ君が小学校家庭科の臨時教師をしたということで、右派マスコミに叩かれたようですが、決して怯まぬよう本人には伝えたい(本人に直接手紙を書くのは許されないので、本紙面を借りたい)。

天皇性批判映画や南京大虐殺映画の自主上映に対する右翼の妨害など、日本では日常茶飯事。今回の件は、そういった状況の1事例であり、1事例ではない。作用には、反作用がある。自然も社会もこれが運動の法則。頑張してほしい。重信の娘というだけで、政治的活動ではないことまで、イスラエル大使館と共同して排除することが問題だと、支える会も声上げる必要があるのでは。様々なミニコミ紙やアラブ諸国の報道機関(アラブ系通信社)、在日アラブ大使館などにイスラエル大使館や右派マスコミの動向を伝えるということも必要と思います。

丸岡修(仙台刑務所)

4. 拙歌について。8号に私のへたな短歌を紹介してくれてありがとうございます。ですが、575の定型に区切るのはやめてください。原文通り一連にするか、上の句と下の句で分けるか、石川啄木のように三行でやって下さい。「目には目のムスリム右翼、歯には歯のアメリカ、テロにはテロの巡り」と。私は基本的に定型破り。読点もあり、口語現代仮名遣い使用です。

それでは、重信同志に対抗して幾つか。

弱者の叛を圧する強者の暴
不条理満ちた年も明けゆく
乳と蜜にかけて満ちたパレスチナ
ダビデの星の戦車に満ちる
鉄格子を壁に映す冬の陽の優しさ貰う病気の我
新聞の同志の白髪写真が数える三十年のたたかい
(これは、'00年11月)

5. 会費について。支える会に干渉する気はないし、皆さんのご苦勞は想像できます。その上で例によって“細かい”ことを書きます(笑)。経済難からカンパ込みというのは分かりますが、高すぎませんか。会費はやむをえないとしても、「購読だけ」でも同額というのは、疑問です。せいぜい1部500円がカンパ込みの価だと思います。それ以上はカンパを強いることになってしまうのでは。1部500円とし、その上で協力会費2000円(購読料込み)という具合に。「市場原理」から言えば、会員には特典が必要です(資料送付とか)。会の事情を知らずに書いているので、その点をご容赦下さい。模索舎、名古屋ウニタなどでの書店販売もできるようにすべきでは。公安警察が入手するのを避けるために会員制というのはあまり意味ないでしょう。連中なら平気な顔して会員になっているはず。公然合法の活動をする以上、公安の影に怯えず、より多くの人々に本誌が目を触れてもらうようにすべきではないでしょうか。

6. 丸岡個人誌『夢と希望つうしん』年間購読カンパ1000円(4回発行)。郵便振替口座名「夢と希望」01780-6-97305。年間1000円というのは、本誌への皮肉では決してありません。

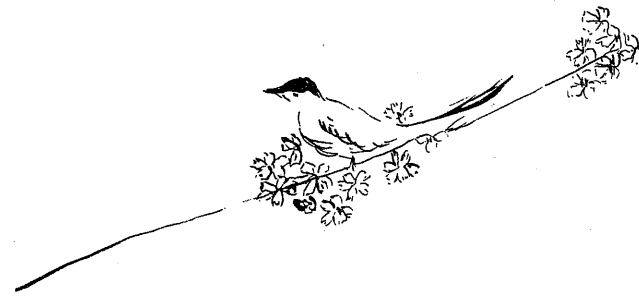
再見!

('02年3月記)

桜日記

重信房子

- 3月 6日 啓蟄の暦に合わせ虫の這う 獄(ひとや)の畳二帖なり
- 3月 8日 春立ちて萌えし桜芽日々伸びて 鉄条網のごと逆光の空
ミモザ抱き共に祝いし女性の日 桜の芽ぐみ届け彼の地へ
- 3月 9日 陽だまりに遊びし野鳥つぎつぎと 新しき服着て現われり
- 3月10日 鶯のくりかえし鳴く桜木の 芽ぐみ萌黄に色付くを知る
- 3月13日 春芽の固き地面にやわらかき 桜芽の影春風に揺れ
- 3月15日 萌黄映え夕陽に光る蜘蛛糸 春雨のあと樹新しき
雨あがり萌黄色に朱の増して 枝にたわむ程芽ぐみ息付き
萌黄立つたわみし枝に朱の増して 神の気配か花こぼれいでん
たちまちに萌黄に朱差し桜木の かすかに割れて白こぼれいで
桜木のその老木の萌黄割れ 咲き初めの白闇に染まらず
- 3月17日 咲き初めの桜一花風の舞
はぐれ鳥ゆきつもどりつ花揺らす
春嵐静かに渡れ一分咲き
- 3月18日 咲き初めし彼岸の入りの花群の 一分が三分と変化眩めく
- 3月19日 花三分獄(ひとや)に春蚊訪れて うたかたの舞いのちさすらう
- 3月20日 五分桜髪を結ってみたくなり
早陽うけうつむき桜上を向く
五分咲きの桜の向こう青空に 飛行機雲の一筋が行く
五分桜闇拒みおりりんと咲く



三月二十二日
囚徒らよ思いの丈を吐くかい
ひとやの桜濁南に咲く

- 3月21日 春嵐満開桜ゆきふりて早く散れよと吾を急くごとし
春嵐花たじろがず散りもせず
満開に彼岸の桜咲き誇り 父の写真を窓際に置く
- 3月22日 囚徒らよ思いの丈を吐くがいい 獄(ひとや)の桜満開に咲く
花曇さえずる鳥に起こされて 出廷の朝端座してみる
後悔と無念の数に絶えかねて 獄(ひとや)の桜一筋が舞う
- 3月23日 春嵐雨降りてなお花満ちて 自ら時を選びて散るらし
咲く時も散る時も又自決する 桜に学ぶ心意気あり
花冷えの独房二畳端座して 満開の宴友に贈らん
- 3月24日 花日和母と吾子等の墓参り 獄(ひとや)で一人笑みこぼれきて
レモン忌に満開桜根元見つ
煩惱の無限の数をとじこめて ひとやの桜満開すら秘す
- 3月25日 満開の桜眩めくその際で 春の野草の萌えたつを知る
満開の白き花影揺らしたる ねずみのごとき百舌点々と
- 3月26日 夜桜のしじまの時の激しさよ 獄(ひとや)で逝きし人々のこと
満開の花の盛りに知りたるは 友の病が癌ということ
- 3月27日 満開を独り占めしてなおさびしい 獄(ひとや)の花の美しければ
鳥たちの足元の花ひらひらと 流れる先になずな萌えたつ
- 3月28日 花守の如くはあれど我が独房 散る花日記いかに書くべし
盛り越え桜もうせん地に満ちて 触ることなきひとやの宴
- 3月29日 西行のうたうがごとし望月に 思いを記す時重ねたし
花満ちて語る人なし月満ちて 列車の音の近づきて去る
望月を待ちて散りゆく桜花
- 3月30日 風に舞う桜吹雪のひとひらの 房に届きて春に触れたり
パレスチナ土地の日の今日送りたき 想いを桜の舞にのせて
パレスチナ蹂躞の報聞きながら 怒り見据えし桜吹雪を
百計の尽きるが如く桜散る
葉桜の育ちはじめを見届けて 時わきまえて花の散りゆく
散りてなお趣変えて葉の育つ 生命新らし君が病も
- 3月31日 黄緑とえんじとピンク点々と 桜変化の終章を見る
- 4月 1日 ひとやの湯天を仰げば葉桜の 花のなごりと空溶けあいぬ
葉桜の桜残りし面会日 エプリルフルに君の死を聞く
修羅の妄放ちて焼きし君の身に 桜重ね吊うリッパ戦士と
- 4月 2日 桜花来よと獄窓開け放ち 風の舞見つ君を吊う
- 4月 4日 花去りて知る葉桜の鮮かさ
- 4月 5日 明け残る獄庭に楚々とスノードロップ 君吊いて桜根に咲く

投稿

シゲに捧げる「私小説」その9

山田美枝子

1960年代から1970年代にかけての記憶は、シゲと私の人生の中で、最も強い印象として自身に刻み付けたはずだ。なぜなら、人生の終わり近くに思い出すのは、15、16、17歳あたりの記憶であるらしいからだ。

今、同居している姑の山田キヨノは80歳を過ぎ、痴呆が進み、自分が結婚したことも子供を生んだことさえ忘れ、少女の頃過ごした山口県の田舎での生活をひたすら思っている。「家族は？」と尋ねると、「父と母と兄さんと姉さんが居たはずじゃ」と答える。「お子さんは？」と尋ねると、笑って「そんなものいませんよ」と答える。20歳過ぎに結婚し、二人の男の子を生み、女の子を一人墮ろしていることは、頭に刻み込まれてないのだ。

だから、将来、シゲと私が万が一、痴呆老人になったら、自分の人生のどの部分を語りだすかと思うと、きっと、1960年代から1970年代の自分ではないかと思うのだ。

1961年4月、シゲと私は、それぞれ、世田谷区と渋谷区の中学校を終え、渋谷区の鉢山という小高い丘の上にある、都立第一商業高校に入学した。その時点で、二人は少し自棄気味になっていた。私たちは二人とも、向上心の強い一応勉強だけでプライドを保っている少女だったから。当然、普通高校の上位高校に入る実力はあると思っていた。でも家の事情は無視できなかった。就職率のいい商業高校を選ばざるを得なかった。

後年、私たちの担任教師のM先生が私へ語った。「あの時代、成績の上位入学者の中には二つの傾向があらわれた。一つは、トップ級で入ったがその栄光を維持するのに死力を上げ、クラスの模範生となる。二つ目は、ある程度手を抜いて、(いい会社に行ける位の成績で)好きなことに精を出す。(会社に入った先輩から、どうせ君たちは下士官止まりと言われたことも響く)。この二つ目の方は、校内の成績格差が大ききときに多く出る。いわゆる面白い奴だな、シゲも君も二つ目の分類に入るよ。」

シゲは文芸部に入り、幸田紗代というペンネームで小説を書いた。ガンコな父親をもった幸田文

にあやかりたかったのかもしれない。とにかく文学好きの少女のシゲは、あの頃武者小路大先生にも会いに行き、ちゃんと会って話もして、おみやげに色紙まで頂戴してきた。シゲの積極性、明るさ、真っ正面からの問いに、大文豪はきちんと反応してくれたのだ。「友情」の中の杉子という女性は、非民主主義的でよくない、などとシゲは言ったのだという。

私の手元に高校卒業時に作った分厚いクラス文集がある。17歳の多感なシゲが書いた誌と小説が載っている。小説の題は「嘘つき」。原稿用紙13枚の掌編小説だ。

嘘つき

幸田紗代

「早く降りろ、おやじが来た、早く」

考二は声を殺して塀にのぼっている三人の仲間にも怒鳴った。三人共、思い思いの格好で、夢中で飛び降りた。そしてひざをすりむいた者や砂利の上に素足を思いきりたたきつけてしまった者も有った。柿泥棒は、失敗に終わってしまった。みんなは急いで下駄をつっかけて、メンコをやっているふりをした。柿ノ木の持ち主の「おやじ」が現われても、気付かれぬようにするためだ。四人は少しの間顔をみあわせたまま、「おやじ」の足音に聞耳をたてた。なんの音もしなかった。そしてとうとうおやじは現われなかった。

「馬鹿野郎、嘘つき野郎の馬鹿野郎」

「そうだ、そうだ、考二の嘘つき」

塀から夢中で飛び降りてすりむいたひざ小僧をなめながら口をとがらせてサブが言うと、あとの二人も口々に、考二に悪口を浴びせかけた。

「でも本当だい、本当だよ。おやじはその路地を曲がっちゃったんだらう。おいらが見たとき、おやじはこっちに歩いて来たもん」

考二は顔を紅潮させて弁解した。

「でもよ、考二の言うことあ、あてになんねえもんな、いつもお前は嘘をつくからよ、なあみんな」
「そうだ、そうだ」

「嘘つき野郎、おかげで俺はあんなに高い塀から飛び降りて、けがしちゃったじゃねえか」

「悪いぞ考二、あやまれ」

(つづく)

支える会の会報「オリーブの樹」購読を継続してください

協会員の皆様、ご支援ありがとうございます。

「オリーブの樹」も第11号を発行できるはこびになりました。皆様のご協力の賜物です。また、会員の約半数の方から、継続会費をお送りいただいています。ただし、会費が切れたままになっている方も居られます。どうぞお支払い頂き、継続的に「オリーブの樹」を購読くださいますよう、お願いします。編集部一同、皆様のご支援に感謝し、今後も定期発行を続けていきたいと張り切っています。

また、一人でも多くの友人・知人に声をかけて、「オリーブの樹」の読者を広げていただくことを、お願いします。

会費は、月2000円です。会員には会報「オリーブの樹」を、無料で毎月郵送します。

「オリーブの樹」の「購読だけしたい」という方の購読料も、会費と同額（2000円）です。住所、宛名を明記し、代金を送っていただければ、次の号からお送りします。

いずれの場合も、会計の都合上、1年分（24000円）か、半年分（12000円）をまとめて送金していただくと、大変助かります。郵便振替（番号下記）をご利用いただければ便利です。

会費および購読料は、重信さんの支援に充てられます。是非協力してください。

次回公判日程

5月17日（金）13時15分

6月28日（金）13時15分

6月5日（水）13時15分

7月19日（金）13時15分

東京地裁（最寄り駅 地下鉄 霞ヶ関）104法廷

傍聴券の配布は、開廷の20～40分前です。確実に傍聴を希望する方は、早めに地裁前に集合される方がいいでしょう。

後記

今回は、重信さんから沢山の原稿が届きましたので、それらを載せられるように頁を増やしましたが、じゅんこさんの写真を載せるスペースを取れませんでした。申し訳ありません。

「オリーブの樹Q&A」も削りました。ただし、重信さんの「独居より」の中に内容的に含まれていますので、ご容赦下さい。

3月30日、パレスチナ国際連帯デーに、イスラエルに抗議して、日比谷公園で、旧い友人が焼身自決しました。その衝撃が目を追うにつれ深まり、辛い月でもありました。なぜ？という問いは消えませんが、確かなことは、人のことを自分のこと以上に心配していた、心優しい彼が担っていた多くの任務を引き受け、闘い続けていかななくてはならないということです。パレスチナへと旅立った彼に、冥福を祈ります。

パレスチナで起こっていることに無関心ではられません。アメリカの外交では何も解決しません。私たち一人一人が沈黙せずに、より広い国際連帯の力で、シャロン政権のテロに対抗し、その政策を覆し、パレスチナとイスラエルの永久的な平和の条件を作り出していかなくてはならないでしょう。

その第一歩を、同じように平和を願う人々と力を合わせて、踏み出していきたいと思うこの頃です。

皆様の意見、批判、提案、イラスト、なんでもお寄せください。お待ちしております。（Y）

連絡先 〒105-0004 東京都港区新橋2-8-16 石田ビル4階
救援連絡センター気付 「オリーブの樹」事務局
郵便振替 00110-4-613941 オリーブの木

「正誤」表

第11号

- ①5P右上から3行目 国際攻防で縮められ→狭められ
②7P右上から5行目 変者は現政権～→変革は現政権～
③7P右下から21行目 市民社会の教化→市民社会の強化
④7P右下から6行目 ユダヤロビー→イスラエルロビー

* ユダヤ人のロビー活動というよりも、イスラエル支援のためのロビー活動には、ユダヤ人も非ユダヤ人米国福音主義派も加わっているため、イスラエルロビーに改めます。

- ⑤8P右下から4行目 朝鮮語版→韓国語版
⑥9P左下から23行目 少しずつ空けていく→少しずつ明けていく
⑦9P左下から13行目 木々を間時か→木々を間近
⑧12P右下から4行目 「戸平・西川の自供が～
→__戸平・西川の自供が～
⑨15P左上から18行目 安達さん→足立さん
⑩15P右下から5行目 地下平坦→地下兵站
⑪16P右下から23行目 アリストロメディア→アリストロメリア